

(5)

解説・総合

昭和58年2月10日(木曜日)

11

潮流'83

行き詰まった米中関係

二月六日の朝、私はたまたま、中ソ接近をテーマにしたTV番組に出演中だった。そこへ訪中したシュルツ米國務長官が朝鮮半島に「南北クロス承認」を中国側に打診したとのニュースが入ってきた。当然、司会者にその場で意見を求められたのだが、これは米中外相会談がう

まくゆかなかつたために、何らかの「おみやげ」を必要とするシュルツ國務長官が訪韓をまえに打ち上げたアドバルーンではないかと私は直感した。

ともそも「南北クロス承認」に「かんしては、中国側は朝鮮半島の南北を断固定化に近づけるといふ北朝鮮の意向

を尊重して、きわめて消極的であることを私は確認していたからでもある。次に入ってきたのが、趙紫陽首相の年内訪米決定というワシントンからのニュースであった。このときにも私は、趙紫陽訪米が実現するのだからかという危機の念にとともに、たとえ実現しても、趙紫陽首相の訪米であれば、形式的な首脳外交でしかないだろう

中国の戦略、根本転換

「米・日・韓」強化にも警戒的



中嶋 嶺 雄

いたが、その直後に教科書問題をめぐって中国側の強い対日批判が展開され、趙首相の面目は丸つぶれになったのであった。そうした文脈で考えると、中国側は、このころ、金日成・北朝鮮主席やフランス共産党のマルシェ書記長、それに香港の将来をめぐっても重要なかわりあいのあるイギリスのサッチャー首相など、

らすれば、台湾への武器供与問題をめぐって行き詰まった米中関係を打開し、アメリカが懸念する中ソ和解への動き

そう簡単には妥協できないのである。一方、アメリカ側においては、次期大統領選挙の日程が近づけば近づくほど、レーガン大統領としては、再び親台湾のポーズをとる必要があり、そのためにシュルツ國務長官と意見が一致しなければ、ハイグ前長官同様、國務長官の首のすげえぐらいは辞さないであろう。

二つして見てみると、現時点での中米関係の打開はもはやそう簡単ではないと私は考えてきた。案の定、趙首相の年内訪米という約束はなかつた。中国側は今回の米中会談での不一致を早くも暴露しはじめ、新華社は「台湾関係法の廃棄を改めて迫っている。

うと思った。なぜなら、趙首相は、このころ中国外交の顔面として、アフリカをはじめあちこちに出かけているが、中国政治の現段階における重要な政策決定者とは思われず、鄧小平、胡耀邦らの党首脳に比べて、かなり軽い存在だと私は見なしているからである。現に昨年六月に訪日した趙首相は、「米中関係が悪化しても日中関係は永遠です」などと外交辞令を呈して

訪中の目的は、アメリカ側からすれば、台湾への武器供与問題をめぐって行き詰まった米中関係を打開し、アメリカが懸念する中ソ和解への動き

を牽制するためのものであったことは明瞭である。ところが、すでに中国内政の非毛沢東化に伴って、毛沢東・周恩來時代の対米戦略から根本的に転換し、いまや中ソ和解へと進みつつある中国側からすれば、そもそも台湾問題での対米強硬姿勢は、昨

このように、七〇年代初頭以来の中米関係とは、今日、潮流が基本的に変わってきているのだ。にもかかわら

だが、たとえば中曾根首相の訪韓や訪米についての中国側の見方が、ソ連や北朝鮮と同様に、きわめて批判的かつ警戒的になってきていることに示されるように、今後、中国は、米中関係のみならず、日本の防衛力増強や米・日・韓関係の強化にたいしても厳しい姿勢を示すのではなからうか。自民党の二階堂幹事長の訪中へついて中国側をなだめられると思ったら、大間違いだと思は見なしている。(東京外大教授)